朝鮮石人像を訪ねて（53）

深田　晃二

1．東京　五島（ごとう）美術館

世田谷区上野毛（N35.61228,E139.63567）

◆　この美術館は、東京急行電鉄（東急）の創業者である五島慶太（1882 年～1959 年）が死去した翌年に、そのコレクションを公開するため創立されたものである。ライバルとして知られる西武鉄道の堤康次郎同様、美術品のコレクターだった。

数々の競合鉄道会社を M&A を用いて次々と買収。その強引な手口から「強盗慶太」の異名をとったという。また鉄道事業では優れた経営を行い、阪神急行電鉄（現・阪急電鉄）の小林一三と並び、「西の小林・東の五島」と賞されたとも言う。

場所は世田谷区上野毛（かみのげ）に有り、電車だと当然ではあるが東急沿線で、自由が丘と二子玉川の間の上野毛駅で下車し徒歩６～７分ほどの所にある。美術館の隣は、日本商工会議所会頭を勤めた長男の五島昇（1916 年-1989 年）の家がある。現在も表札が掛かっている。

この美術館に石人像があることはネットで知り、昨年訪れた時には休館日の月曜日で門前払いをくい、思いが残っていた。今回は「近代の日本画展」開催中で、横山大観・狩野芳崖・川合玉堂・橋本関雪などの日本画を本館内で堪能（？）した後、目的の庭園にある石造物を探索した。案内書にもあるように、「武蔵野台地が多摩川で浸食された国分寺崖線上に作られていて、高低差が 35m と大きく、健脚コース」である。館内と合わせて２時間くらい歩き回った。まだ健脚組に入ると自信を持った。大日如来像当たりで濡れた石畳で滑って尻餅をつきそうになったが、荷物なしで両手が空いていたので辛うじて手で支えることができた。入場料が 1000 円と高めだったが、コインの帰ってくる大型の無料ロッカーに荷物二つを預けて助けられた。

朝鮮灯籠の当たりに「富士山ビューポイント」があったが、あいにくの天気で霞んでいて富士山は見えなかった。

◆　広い庭園内には、朝鮮石人像（2 体）、灯籠（3 基）、石羊（2 対 4 体）、望柱石（2 基）があり会うことができた。そのほか石塔・石灯籠・石仏等が多数有り、８割方はしっかりした説明看板が自然の中に溶け込むように配置してあり、楽しめる庭園である。

庭園配置図は左の絵ようになっていて、一筆書きでは歩けない道の数なので、歩いた所をマークしながら、見逃し無く歩いたつもりである。

各石造物の庭園内の位置は庭園案内図への赤文字の書き込みを参考にして頂きたい。

本館から庭園へ出て左へ行くと、まず紗帽（サモ：階段状）冠の文人像が天佑庵門の脇で出迎えてくれる。この庭園の中で一番立派な朝鮮石造物である。２体で対になるのが普通であるが、ここには１体しか無い。背の丈は 180cm くらい、ふくよかな体躯をしていて、掘りも深く見栄えのする文人像である。いつの頃からか、会えた石造物には、「どっから来たん？帰りたいねー。」と話ながら、トントンとたたいたり、さすったり、花崗岩の石質を感じながら挨拶することにしている。

赤門のワキには、これも一体だけだが内侍像が有る。文人像ではあるが、王に仕える髭の生えない男性、いわゆる宦官を模した（宦官の墓に設置された）石人像である。高さは通常の内侍像と同じく 120cm くらい。良い場所に設置して貰って、風景になじんでいる。何故か見る者に満足感を与えてくれる。

◆　次に朝鮮燈籠３基が出現する。朝鮮燈籠は重厚な屋根に特徴がある。王陵では墳墓の正面に１基設置され、長明灯と言われる。士大夫や民間墓で実際に設置されているところはまだ見たことはないが、韓国古石

博物館初め各所に多数展示されている。本来は士大夫墓などにあったものが集められたのだろうか。

王陵の長明灯に比べ確かに一回り小さいようにも感じるが、立派なものもある。ここの写真左の１基は足が折れたのか土中に埋めてあった。

◆　石羊２対（４体）

見晴荘の先に九重石塔があり、その前に一対の石羊がある。まるまるとした雄の羊である。右側の石羊は頭部が割られていて欠損している。ここで重要な発見があった。今まで見たこと

のない模様が彫り込まれていたのである。頭を割られた方がはっきりしているが、２体とも同じ模様がある。左の写真のように足の付け根から、ワラビかゼンマイのような両方向の渦巻きが彫られている。前足も後足も同様に。まさか脇毛を表現したのではないだろうが、どんな意味があるのか全く不明である。

大日如来像の前にも石羊１対が有る。こちらはごく一般的な石羊である。両方に挨拶は欠かさずしてきた。

◆　望柱石２基。細虎（セホ：リスのような動物）は、２基とも彫り込んでなかったが、本来の１対のように

見受けられた。左の１基は２カ所が折れ継いであった。

出口近くに設置してあり、うっかり見逃すところであったが、見つけることができて歓喜した。この石畳の道沿いに多くの六地蔵・三猿像（見猿、聞か猿、言わ猿）・如意輪観音像（立て膝ほお杖姿の半跏思惟二臂の女性墓石）が多数設置してあった。案内図で分かる

ように、この道は大外回りなので見逃し安いが、重要な道である。この庭園はなかなか奥深いと感じた。

◆　井筒

井戸の石組み等を「井筒」と言うことを知った。そして互いに腕を出して組んだ井筒を「組井筒」と言うことも初めて知った。

今まで井戸枠と言っていたものである。五島美術館庭園にも何個か井筒があるが、この製作技術の出所は中国か朝鮮か日本かは私には分からない。同様に三・五・七・九・十三重の石塔の出所も私には釈然としていない。多分混合した文化だとは思うが。

2．創業者のコレクター

この五島美術館のように 、企業創業者が集めた美術品がその人名を付した美術館や博物館に保管されている例が多い。次の上京時には、ポンプの荏原製作所創設者・畠山 一清（1881 年–1971 年）の畠山記念館の石人像を訪ねる予定である。所在地調査手詰まりの打開策として、創業者による博物館リストを作ってみようと考えている。

3．韓国洪城プルム学園

4 月 21 日の韓国合宿で訪れた忠清南道洪城郡洪東面の「プルム学園」で、83 才の洪淳明（ﾎﾝｽﾝﾐｮﾝ）先

生の感動的な話を聞くことができた。素晴らしい有機農業そして人物形成を通しての町おこし事業を展開されている。入り口の看板に「６・１５南北共同宣言[※1]と平和憲法九条[※2]を支持する区域」と高らかに宣言してある。近くに資料館があり、その柱影に童子像が一体あった。顔の彫りが未完成の習作のようであったが、今年の合宿で出会った唯一の石人像である。　（続）

※1 2000 年金大中大統領が訪北した時の宣言。

※2 日本国憲法第９条。